平成二十七年度入学試験問題

国　語

注　意

一　問題冊子は一冊（12ページ）、解答用紙は二枚、下書き用紙は一枚です。
二　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
三　すべての解答用紙に、それぞれ二箇所、受験番号を算用数字で記入しなさい。
四　解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
五　試験終了後、問題冊子と下書き用紙は必ず持ち帰りなさい。

問題　一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に省略した箇所がある。）

人間の歴史のなかでの哲学史ということを改めて考えてみると、世界の哲学の歴史は、インドや中国、ギリシアなどでほぼ同時期に始まった営みだといえそうである。そして、そのなかでもとりわけてギリシアに発した哲学的反省のスタイルが、その後の哲学史の大きな基礎を提供したというふうに考えられる。

まず、(1)神話の時代を脱皮して、哲学的思考のスタイルが世界においてほぼ同時期に開花したというのは、次のようなことを指している。

人間の文明史を見ると、紀元前四〇〇〇～五〇〇〇年前から紀元前二〇〇〇年くらいにかけて、メソポタミア地方、エジプト、インド・インダス川流域、中国・黄河流域などで、大規模な文明が花開くとともに、都市文化の初期形態が形成されたということはよく知られている。これらの文化の基本は青銅器文化であったが、それが紀元前一〇〇〇年頃には鉄器文化へと進化した。この古代文明の世界において、人間は宇宙と生命の生成、構造、その変化の原理についてさまざまな説明の物語を構想したが、この説明を担う主たるロジックは、無数の神々の活動や性格にもとづくものが多かった。すなわち、神々の行動や性格、神々同士の争いと、それに巻き込まれた人間の運命やドラマなどが、世界の起源と歴史的進展の背後にある理由であるという考えであり、これがいわゆる神話的思考の代表的なスタイルであったと言えるであろう。

この宇宙と生命についての説明原理は、鉄器文化が成熟して都市文化の規模が大きくなるにつれて、神々を主体とする擬人的な物語から、より理性的な原理や人間の本性をもとにした理解へと徐々に変化していって、それが哲学の誕生と発展へとつながった。鉄器文化は紀元前一〇〇〇年頃にメソポタミアやエーゲ海、ガンディス川流域、中国各地へと拡散したが、紀元前六世紀前半にはギリシアの哲学者の祖とも言われるタレスが活躍し、同じ世紀のほぼ半ばに北インドで釈迦（しゃか）が生まれたと言われ、北中国では孔子が生まれている。つまり、古代文明の(ア)チクセキが紀元前六世紀から五世紀にかけて、哲学の成熟という形で結晶す

ることになったわけである。

このとき、これらの哲学におけるさまざまな理論的相違とともに、基本的な発想の大きな共通点があるということがまず注目される。その共通点とはまさに、(2)われわれが人間や生命を考えるときの根本的な原理、すなわち「魂」という考え方が、これらの思想において文明横断的に広く共通に見られるということである。

魂という言葉は霊魂という言葉で言い換えてもよいが、古代以来の伝統的な思考において広く世界に共通な形で用いられている概念である。霊魂といえば場合によっては幽霊などの、何やら不可思議なものが連想されるかもしれないが、ここで注目しようとしているのは、古代哲学の基礎的な用語としての魂ということである。魂はギリシア語ではプシューケー、ラテン語ではアニマと呼ばれるが、英語でサイコロジーとかサイコパスなどと言われるときの、心理を表す言葉の語幹 psycho は、このギリシア語の psykhe をもとにして作られている。また、アニマが動物のアニマルや動画のアニメーションにつながっているのは非常に見やすいところであろう。

哲学の用語としての魂は、世界の内なる「生きているもの」すべてがその生命の原理としてもっているものであり、この魂の働きの(イ)コンカンは生命の維持ということにある。しかし、生命の維持の働きは、生物のさまざまな種類によって、高低さまざまな複雑性をもっており、もっとも高度な人間においては、生命の維持の原理が同時に精神的な機能、思考したり感情をもったりする働きに直結している。つまり、生命の維持と精神の機能とは同じ魂の働きとして一つなのである。

生命の原理であるとともに精神の働きでもあるような、魂、ないしそれに近似した考え方。これが、非常に大雑把にいうと、文明の東西を問わず、古代世界の共通の見方であったと思われる。

たとえば、古代中国の思想では、広い意味での人間などの精神の働きに相当するのは、陽の霊気である「魂」と陰の霊気である「魄」である。前者は精神活動を司り、後者は肉体活動を司るとされているが、これは精神活動と生命活動とを、魂魄という一組の原理によって説明しようとする考えの一例である。この考えは孔子などの儒家が重視した、四書五経のなかでも筆頭に位置する『易経』や、老子などの思想にもとづく道家などで採用されているが、同時に、古代中国の医学思想にも結びついている。魂

は肝に宿って成長を司り、心をトウセイ(ウ)する。魄は肺に宿って骨格を作るとともに、感情の乱れを生み出したりする。

一方、魂魄は「陰陽五行説」[注一]のなかの、陰陽の原理を生命活動に当てはめた場合の用語であるが、この陰陽は、「木火土金水」や「春夏土用秋冬」などの五行と同じく、世界の変化と運行の原理を普遍的に司るいわゆる「気」の原理の一部であるとされる(五行とは、陰陽の気がさらに分化して捉えられたときの自然の働き方を指している)。したがって、世界の一切の現象は「気」という、形なきもの、流れでありながらある種の普遍的なエネルギーと見なしうる原理の下で、さまざまな局面から説明されるということになる。

他方、中国では古くから「気」の原理の他に、「理」という原理も考えられていて、気が目に見える現象、「形而下」の世界の説明原理であるのにたいして、理はその背後の論理的原理、「形而上」の世界の原理であるという考え方もあった。この考えも気と同じように、『易経』などで論じられたが、正確に言えばこうした理気の思想や気の役割は、それぞれの学派でかなり多様な解釈の下で自由に展開されていたために、中国の春秋戦国時代に世界解釈の普遍的道具立てとしての陰陽五行説というものが、しっかりと整った形で成立していたのかと言えば、必ずしもそうではない。理気二元論を含めて、個別的生命から宇宙全体をも含めた形而下的現象の一切を、気の原理の下で理解しようとするタイケイ(エ)的な視点が整ったのは、ようやく宋の時代になってからであり、宋学の世界観、特に南宋の朱熹が起こした朱子学によって正統的な中国の世界観が作られたのである。

さて、日本では江戸時代に、この朱子学が中国と同様に正統思想とされたために、哲学としての理気二元論(3)が採用されるなかで、人間の魂をめぐる「魂魄」という概念も広く使われていた。このことは当時の歌舞伎のセリフなどから容易に知ることができる。たとえば、江戸から明治にかけての時代には、『東海道四谷怪談』などのいわゆる怪談と呼ばれるジャンルのドラマが多く作られているが、そこでは深い恨みをもった人物の死後の霊が成仏できずにいることを、「魂魄この世にとどまりて」などというセリフで表現されている。われわれが「成仏」と言うときの霊魂は仏教思想から来た仏であるが、幽霊になってこの世に出てきているのは中国由来の魂である。

このように、近代日本の伝統的精神観も複雑であるが、それ以前の古代から伝えられてきた日本の霊魂観の理論的中核につい

注一　有心之用＝意図した行動。

注二　無心之値＝意図せずに生じた結果。

注三　漢高＝漢の高祖、劉邦(在位、前二〇二年～前一九五年)。前漢王朝を創始した。

注四　諸葛＝諸葛亮(一八一年～二三四年)。三国・蜀の名臣。漢の復興を掲げたが、志半ばで没した。

注五　百族＝ここでは多くの蟻。

注六　浮尸＝ここでは蟻の水死体。

注七　弁論＝ここでは議論の正否を区別すること。

問一　傍線部(1)を現代語訳しなさい。

問二　傍線部(2)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問三　空欄A・Bに入る熟語を、本文中から選んで書きなさい。

問四　波線部によって筆者は何を言おうとしているのか、この文章の主旨をふまえて説明しなさい。

ては、土着の思想に加えてインド、中国由来の伝来思想の混入が数次にわたって見られるために、さらに混沌としていて、はっきりとした理解をもつことは困難である。とはいえ、日本の土俗的な魂論が、人間とその他の事物とが生命の原理を共有するという「アニミズム」であったことは間違いがない。アニミズムとはまさしく、先に挙げた魂としてのアニマという言葉からきている概念で、自然界の一切の事物が生きていて、ある種の心をもつという考えである。日本の古くからの魂論では、この土俗的な発想の下で、死者の霊が、死後しばらくは地上の周囲に留まった後に、次第に山のほうに向かっていって「先祖」となり成仏するとされたり、その先祖の霊が盂蘭盆会や正月に帰ってくる、と言われたりする。また、平安時代に盛んになった陰陽道などの考えでは、地上に留まった霊が「怨霊（生霊や死霊）」となって祟りをなすとされたりもした。いずれにしても、(4)こうした多様で複雑に屈折した魂の理解が、今日まで続く歴史のなかで、日本語の「心」という言葉に独特の豊かな陰影を与えてきたことは間違いないであろう。

（伊藤邦武『物語　哲学の歴史』による）

注一　陰陽五行説＝中国古代の哲学思想で、陰陽説と五行説が一体化したもの。陰陽説は、宇宙の現象事物を陰と陽との働きによって説明するもの。五行説は、万物の根源は木火土金水の五元素から成りその循環交替により宇宙が変化するという説。

注二　盂蘭盆会＝お盆。

問一　傍線部(ア)(イ)(ウ)(エ)を漢字に直しなさい。

問二　傍線部(1)について、このような現象が生じた背景には、どのような考え方の変化があったのか、説明しなさい。

問三　傍線部(2)について、文明横断的に広く共通して見られる「魂」の考え方を説明しなさい。

問四　傍線部(3)に「理気二元論」とあるが、筆者は「理」と「気」をどのようなものとして説明しているか、簡潔に述べなさい。

問五　傍線部(4)について、日本で「多様で複雑に屈折した魂の理解」が行われてきたのはなぜか、説明しなさい。

問題　四

次の文章は、「天」と「人」との関係を「人」と「蟻」との関係に置き換えて論じたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文や送り仮名を省略した所がある。）

天地有功禍而無賞罰。A者、有心之用也。B者、無心之値也。漢高所居、五色雲起、諸葛将薨、大星墜地。是天地有功禍也。(1)漢高何徳以興、諸葛奚罪而亡。是天地無賞罰也。然則天之于人、(2)猶人之于蟻乎。遺肉于地、聚者百族、負焉而趨、隆焉而居、利其身、肥其子孫。人之功、而非賞也。傾烈火、沃沸湯、卵傾巣覆、浮尸百万。人之禍、而非罰也。彼蟻者豈無善悪功罪、叫号呼切、日弁論于人之側者乎。而人無見聞也。

（袁枚『小倉山房文集』による）

問題　二

次の文章は、高田郁の「ムシヤシナイ」[注一]の後半である。秋元路男は、定年後駅蕎麦屋を任されるようになり、大阪で独り住まいをしている。そこへ中学三年になる孫の弘晃が東京から家出してきた。幼少の頃以来の再会となる弘晃が、祖父路男の駅蕎麦屋を「ちゃんとした食堂とは違う」と挑戦的に言うのに対して、大阪には、虫養いという言葉がある、取り敢えず駅蕎麦で虫養いして力を補う、そういうのを大事に思うという話をする。二日目の夜になって弘晃がようやく心を少し開き、父親を包丁で刺すかも知れないという心の内を語る。以下の文章は、その日の深夜からの場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。

営業中は圧倒的な存在感を誇っていた駅蕎麦屋も、商いを終え、照明も落ちてしまえば影が薄い。

ほんの数時間前にかけた鍵を外し、明かりをつけると、路男は弘晃を厨房に招き入れた。

落ち着かない様子で店内を見回す孫には構わず、ネギの根を落とし、流しで洗って俎板に束ねて置き、包丁を添えた。

「さて、と。弘晃、こっちおいで」

声をかけられて、祖父の方へ向き直った弘晃だが、俎板に置かれた包丁を認めると、ぎょっとして両の肩を引いた。

「ジィちゃん、オレ、包丁は……」

両腕を後ろに回して身を強張らせる弘晃に、路男は緩やかに頷いてみせる。

「大丈夫、ジィちゃんが手ぇ添えたるよって」

祖父に言われて、孫は俎板の前に立つと、恐る恐る包丁の柄を握った。朴の木を用いた白い柄を、しかし、弘晃は掌に包むだけで精一杯の様子だった。

「もっとしっかり握らなあかん、かえって危ないで」

こうするんや、と路男は孫の手に自分の手を添え、がちがちに固まった指を解して、正しく持たせた。

「せや、『小峯にぎり』いうてな、この持ち方を覚えたら、これから先、色々と役に立つ」

注一　女御＝花散里と同居する姉。桐壺院の女御だった。

注二　書きつづけむもうるさし＝女御の様子について、これ以上は煩わしいので書かないということ。

注三　この御蔭に隠れて過ぐいたまへる＝女御と花散里が光源氏の庇護を受けて暮らしてきたということ。

注四　殿の内いとかすかなり＝花散里と女御の邸が、人の気配がなく静まりかえっているということ。

注五　住み離れたらむ巌の中＝光源氏がこれから下っていく須磨における暮らしを言う。

注六　西面＝花散里を指す。

注七　よそへられて＝月が、帰って行く光源氏の姿になぞらえられてということ。

注八　濡るる顔＝花散里の袖に映える月が泣いているように感じられるということ。

問一　傍線部(ア)(イ)(エ)を、指示語や省略の内容を明らかにしつつ現代語訳しなさい。

問二　傍線部(ウ)(オ)を現代語訳しなさい。

問三　波線部に「思しやられて」とあるが、光源氏がどのようなことを思いやっているのか、わかりやすく説明しなさい。

問四　女君(花散里)は(I)の和歌で何を訴えているのか。そして、光源氏は(II)の和歌においてどう応えているのか。(II)に用いられている掛詞をふまえて、わかりやすく説明しなさい。

そうして、ネギに刃をあてがうと、

「よっしゃ、ほんならネギ切ってみよか」

と命じ、手を添えたまま刻み始めた。

切りたくない、との思いが弘晃の腕を重くする。難儀しながらも、路男は弘晃を導き、さくっさくっとネギに刃を入れていく。

「口に障らん厚み……これくらいの小口切りにな。ほな、自分で切ってみ」

見本を示すと、祖父は孫の右手を解放した。

必死の形相で、弘晃は包丁を握り締めて、ネギを刻む。ざく、ざく、とぎこちない包丁遣いは、しかし、暫くすると、さく、さく、と徐々に柔らかな音へと変化していった。それにつれて、弘晃の身体の強張りは取れ、表情も少しずつ穏やかになっていく。

「いくつもの塾をかけ持ちして、実力以上の中学に受かった。けど、入ってみたら秀才がゴロゴロ。授業についていくのがやっとだった」

路男はただ無言で、孫の打ち明け話に耳を傾ける。

「親父には努力が足りない、と殴られてばかり。でも、足りないのは努力じゃなくて、能力だったんだ。三年通ってそれが身に沁みた」

自身に言い聞かせるような口調だった。

(1) たかだか十五歳で、自身の人生を諦めた様子の弘晃の姿が、路男には胸に応える。それに耐えて、祖父は孫の包丁遣いを見守った。

(2) さくっさくっ、という包丁の音は、何時しか、とんとんとん、と軽やかな音色へと育っていた。俎板の上で包丁がリズミカルに踊り、正確な厚みでネギが刻まれていく。用意したネギの束もそろそろ尽きようとしていた。

問題　三

次の文章は『源氏物語』の一節である。政治的な後ろ盾であった父の桐壺院が亡くなり、政情が不利になった光源氏は都を去り、須磨へ移る決意を固めた。光源氏の妻の一人である花散里(女君)は光源氏ただ一人に暮らしを支えられ、姉の女御とともにわびしく過ごしていた。以下は、都を去る前に、光源氏が花散里を訪ねる場面である。これを読んで後の問に答えなさい。

花散里の心細げに思して、常に聞こえたまふもことわりにて、(ア)「かの人もいま一たび見ずはつらしとや思はん」と思せば、その夜はまた出でたまふものから、いとものうくて、いたう更かしておはしたれば、女御(注一)、(イ)「かく数まへたまひて、立ち寄らせたまへること」と(ウ)よろこび聞こえたまふさま、書きつづけむもうるさし。いといみじう心細き御ありさま、ただこの御蔭(注二)に隠れて過ぐいたまへる年月、いとど荒れまさらむほど思しやられて、殿(注四)の内いとかすかなり。月おぼろにさし出でて、池広く山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巌(注五)の中思しやらる。

西面(注六)は、「かうしも渡りたまはずや」とうち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影のなまめかしうしめやかなるに、うちふるまひたまへるにほひ似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、すこしゐざり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。「短の夜のほどや。『かばかりの対面もまたはえしもや』(エ)と思ふこそ。事なしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先の例になるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方のことどものたまひて、鶏もしばしば鳴けば、(オ)世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡(注八)るる顔なれば、

(I) 月影のやどれる袖は狭くともとめても見ばやあかぬ光を

「いみじ」と思いたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

(II) 行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空なながめそ

(『源氏物語』による)

「仰山できたなぁ、おおきにな、弘晃」
業務用の笊に山盛りになった刻みネギを示して、路男は弘晃に笑みを向けた。
「上手いこと使えるようになったな。――もう大丈夫や」
孫に手を差し伸べ、弘晃の右手を包丁ごと、自身の両の掌で包み込む。包丁の刃先が路男の腹を向いているのを知り、弘晃は怯えた目で祖父を見た。
「弘晃、お前はもう大丈夫やで」
逃れようとする孫の手をしっかりと握ったまま、路男はぎゅっと目を細めてこう続けた。
「包丁は、ひと刺すもんと違う。ネギ切るもんや。この手ぇが、弘晃の手ぇが覚えよった」
「あ……」
弘晃の瞳に涙が浮き、瞬く間に溢れだす。堪えようとして堪えきれず、戦慄く唇から嗚咽が洩れ始めた。
心配要らん。
弘晃、もう何も心配要らんで。
号泣する孫の背中を撫でながら、祖父は幾度もそう胸のうちで繰り返した。

翌日の昼過ぎ、乗降客の行き交うホームに、弘晃と路男の姿があった。
駅蕎麦屋の制服に前掛けを締めた路男の姿はひと目を引きそうだったが、案外、気に留める者は居ない。
乗車を促す笛の音が響いて、弘晃は祖父を振り返った。
「親父とちゃんと話すよ。色々、ほんと色々、ありがと、ジィちゃん」
来た時とは別人のような、晴れやかな笑顔だった。路男は大きく頷いてみせた。
「気ぃつけてな、弘晃」
「また来るから」

弘晃が電車に乗り込んだ瞬間、プシューッと間延びした音がして、扉が両側から閉じられようとした。
扉が閉まる直前、弘晃が早口で言った。
(3)「ムシヤシナイさせてもらいに、オレ、何度でも来る」
孫を乗せた電車がホームを出て、その姿が消えてしまうまで見送ると、路男はぼそりと呟いた。
「ムシヤシナイ……何やあいつが言うと、外国語に聞こえるがな」
声に出してみれば、胸に宿っていた寂しさが消えて、路男はからからと笑い声を上げる。
(4)次の電車の入線を告げるアナウンスが、師走のホームに響いていた。

(高田郁「ムシヤシナイ」による)

注一　ムシヤシナイ＝虫養い。一般的には、一時的に空腹を紛らすこと。また、その食べ物。

問一　この作品は、基本的に一人の人物の視点を通して語られている。その人物が誰であるか、傍線部(1)のどういう表現からそれがわかるか、簡潔に説明しなさい。

問二　傍線部(2)で、包丁の音が「育っていた」とあるが、本文全体での包丁の音の変化を示した上で、音が「育っていた」という表現を用いた理由を説明しなさい。

問三　父親を包丁で刺すかも知れないと怯えていた弘晃が、その怯えから解放されたのを自覚したのはどの瞬間か、その瞬間を表す言葉を抜き出しなさい。

問四　傍線部(3)からは、祖父の営む駅蕎麦屋に否定的だった弘晃が、肯定的に受け止めるようになったことがわかる。弘晃にとってのムシヤシナイは、どういう意味を持っているか、わかりやすく答えなさい。

問五　傍線部(4)は、この作品最後の一文である。ここには、路男のどういう心情が反映されているか、わかりやすく答えなさい。